

あいらの歴史と物語

発行人 橋木 雅晴
編集人 宝泉 孝志

帖佐八幡神社の浜下り

始良町無形文化財である「帖佐八幡神社の浜下り」が、11月23日に行われました。稲荷神社を出発の時はたまたま小雨の降る天気になってしまい、行列に参加されたみなさんには気の毒だったと思います。

今日まで伝えられてきた郷土の文化財を継承し、実行(保護)された「帖佐八幡神社浜下り保存会」の皆さんに拍手喝采いたします。この「浜下り」、毎年11月に行われる始良町の伝統行事の一つになっています。八幡神社の御神体を祭った御輿の行列が、松原海岸にある御門神社までの片道約4kmの町内を、鎌倉時代に新しく帖佐の町を築いた人々の努力と苦勞をしのび、感謝の思いをこめて巡回します。

当日は、まず八幡神社のみこしを越し、宇都の稲荷神社まで下りします。境内で行列の隊列を整え、式典の後御門神社を目指して出発します。行列の先頭にはひもろぎを持った人がつきます。その後太鼓、

笛と太鼓(神主)、松明、笹ぼうき、おもどしを持った人と続き、鎧を着た武者姿の三人衆、かみしも姿の武士が先陣を務めます。その後続矛、重たい御輿、楯、きね、再び武者姿の三人衆、かみしも姿の武士、傘、陣羽織のお供衆と続き、最後尾の賽銭箱を担いだ人がしんがりを務めます。

本年は総勢75名を数えるほどの行列でした。

西田 実



悲劇の武将 島津歳久

天下統一を目前の、飛ぶ鳥を落とす勢いの豊臣秀吉、その秀吉から一夜の宿として、虎居城の拝借を頼まれたが断り、道案内では山道へと誘い込み、矢を射かけるように命じた宮之城領主(当時は禰答院)島津金吾歳久を反逆者として、兄である義久に歳久の首を差し出すように命じました。

島津家当主である兄義久の呼び出しに、禰答院から鹿児島へ出てきたものの、周囲の不穏な空気に、今はと覚悟を決め、いずれ腹を切るからには領地の禰答院でと、海路帖佐脇元(脇元は当時帖佐のうち)へと向かいました。しかし、行く手は義久の手勢によって塞がれていることを知り、竜ヶ水に上陸しました。歳久は家臣達の助命を手紙に託し、義久の命によって追跡してきた町田久倍の兵と武士の意地を見せる矢合わせをした後自害、供のもの27名も殉死して果てました。歳久は「中風」のため、刀を手にすることが出来ず、石を持って切腹しようとしたが出来ず、追っ手の者に首を切らせたと伝えられます。これ故歳久は俗に「お石さま」とも言われております。



総禅寺墓地の奥にある歳久の遺体を埋葬した跡地

歳久時に56歳、天正20年(1592年)7月18日のことでした。太閤の厳命によって直ちに首級は肥前国名護屋の陣にあった秀吉の元へ送られ首実検の後、京都の聚楽に送り一条堀川の戻橋に晒さかに首級を盗ませ、今出川浄福寺に葬りました。浄福寺はした禅寺に埋葬され、近くに歳久の御形代として釈迦如来が安置され、これを釈迦堂と呼んだと言われています。それから280余年星霜を経て、世も改まり歳久の裔孫日置島津14代の島



右の写真は国道10号の鹿児島市へ境界を越えてすぐの平松神社、歳久や自刃した家

津久明、埋葬してある歳久の遺体を掘り起こし、首級と供に1棺に収めました。この遺体は現在の平松神社境内の裏にある墓地に埋葬されました。この改葬のなった夜、鹿児島市内の日置屋敷（鹿児島天文館）で奇怪なことが起りました。当主の島津久明が「真夜中に、馬のひずめの音に目を覚まし、静かに聞き耳を立てていると、馬のひずめの音は門から玄関の前に来て止まった様子でした。すると玄関の戸がさっと開き、久明が夢心地に出てみると戸外に馬上豊に歳久が立っていました。しかし、間もなく歳久の姿は消えてしまった」と言うことです。この話は「日置屋敷の怪事」として、日置島津家に言い伝わる話です。

歳久の遺体は大正の終わるか昭和の初め頃、日置島津家の菩提寺であった大乗寺の墓地へ、さらに改葬されたと言うことです。ちなみに総禅寺跡の歳久墓所跡には「島津金吾歳久胴体埋葬地跡」という新しい御影石の碑が建っています。「平成4年8月18日 島津金吾歳久公400年祭顕彰会」と銘が刻んでありました。

濱口純則

帖佐で名所は米山薬師

「帖佐で名所は米山薬師、前は白帆の走り船」。この里謡で有名だった米山薬師は昔も今も風景絶勝の地です。昔のように別府川を頻繁に出入りする納屋町船こそ、今は見られませんが、桜島、錦江湾、別府川の海山川の眺めは一幅の絵画のようです。

帖佐小学校の東の丘の頂にある米山薬師は、1475年（応仁の乱のころ）、帖佐を支配していた豊州家初代・島津季久の第4子起宗和尚が建てました。和尚が越後（新潟県）の米山薬師



小学校裏からの登り口

に参籠した折り、薬師如来の仏像をもらいうけ、この鍋倉の地形が越後の米山薬師に似ていたのでここに薬師堂を建て地名も米山と名乗るようになりました。（越後の米山薬師は日本三大薬師の一つで三階節の“よねやまさんから雲が出た”で有名です米山（993m）の山頂にあります。）

その後、明治2年の廃仏毀釈で廃寺となり、大己貴神を祀って米山神社に改められました。しかし、今でも昔を懐かしみ米山神社なのに多くの人に米山薬師と呼ばれています。

米山薬師は「ホソン神サァー」（天然痘の神様）



米山神社の神殿

として県下に名高く、大正15年に天然痘が流行した時には、日に千人以上の参拝者で混雑したといわれます。創建以来600年の間に、無数の患者が県内各地から押し寄せたであろうことは、参詣道の石段が深く磨り

っていることから十分に想像できます。また江戸時代に書かれた「大石兵六物語」の中では、吉野の狐が娘お菊に化けて「帖佐米山薬師の^{ほうそうみず}疱瘡水をもらいに行った帰りです」といってまんまと兵六をだますくだりがある。その当時鹿児島城下以南からも、白銀坂を経て多くの信者が参拝していたことがこの物語からわかります。

ここから北へ100mの山腹に疱瘡水といわれる水が井戸に湧いています。この水をいただくと疱瘡にかからないか、かかっても軽いと言われました。今でもその靈験を信じ病氣平癒を願って、水汲みの信者があるらしく柄杓が置いてあります。米山薬師の登り口は帖佐小学校の北東角にあって、赤い鳥居をくぐり苔むした小さな石橋を渡ると、岩を削った急勾配の石段が連なり古道の雰囲気が漂ってきます。昔を偲びながら古道を登り、自然とふれあうことのできる絶景の場所です。

橋木雅晴

平山了清の築いた平山城址の話

平山城は別名平安城や帖佐本城とも呼ばれる帖佐小学校の北方約1kmのところにある城跡です。城と云って当時から天守閣などありませんでしたので、むかしの様子をしのぶものは、大きな溝のように掘り下げられた空堀や、曲輪跡と呼ぶ建物などがあつた平坦地、土塁の他は残っていません。また杉林と下ばえの竹木で見通しも利きません。

平山了清という人が京都の石清水八幡宮の分霊を勧請して、家族や家来たちを873人も引き連れてやって来ました。そのころ平山城を中心とするあたりは平山村と呼ばれていたらしいのです。平山氏は京都にいましたが平山村は平山氏の領地だったのです。そして正八幡宮（鹿児島神宮）に年貢の取り立てなどの仕事を委託して

いました。平山氏が正八幡宮に仕事を頼まないで、直接管理するために帖佐へ来たのです。

平山了清は1281年の元(蒙古)の2回目の襲来(弘安の役)の翌年に、京都から船で帖佐松原八幡江湖に着き、そこからさらに別府川をさかのぼって船津に着いたそうです。そこから見た折橋山に城を築こうと考えたわけですから、その山の姿は現在も変わらないでしょうから、わたしたちも船津橋のあたりから折橋山(桜公園・テレビ中継塔付近)を見て、了清が城地と定めた理由を考えてみたらどうでしょうか。また、船津橋の三拾町方向の県道(加治木・蒲生線を結ぶ県道)のすぐ下のあたりまで沼地のような状態だったと書いてあります。そこに立って湖のひろがる風景を歴史の現場で想像することも面白いことです。



平山了清の頃植えられたと伝えられる大銀杏と帖佐八幡神社拝殿



帖佐八幡神社の階段と鳥居参道の左手の大きな空堀を距てて平山城跡になる。

了清はまず新正八幡神社を鎮座させました。これが帖佐八幡神社です。平山城はその後に築くのです。

この平山城でも男達のロマンと失意、悲劇の舞台であり、血塗られた歴史の舞台でもありました。最初の南北朝の時代のころは平山氏は島津氏に従ったのですが、1459年には平山氏の9代目の武豊は守護島津忠国の弟島津季久(建昌城を築いた武将)に対抗して戦いましたが敗れ、指宿に移されました。次に1495年の加治木久平の反乱を起し平山城を攻めましたが平山城の入口にある支城の高尾城で辺川忠直が守り

抜きました。その手柄によって島津氏は忠直を帖佐地頭(帖佐・重富の代官)にしました。しかし、その忠直が島津氏を裏切り反乱を起こしたので、島津忠良(島津日新斎とも言います)が忠直を攻めて殺します。忠直の後の地頭に島津昌久を地頭にするのですが、今度もその昌久が裏切り謀反をおこしますので、これも島津忠良が討ち取ります。その後に伊地知重辰を地頭にします。すると今度は島津氏と対立する祁答院(渋谷)重武が重辰を攻め帖佐城・山田城を攻め落とし重辰は殺されます。その後、島津忠良の子貴久が祁答院・蒲生・菱刈などの連合をうち破り、祁答院良重(重武の子)を祁答院に敗走させて帖佐郷一帯は島津氏の領地となりました。岩剣城の戦いはこの平山城を取るための戦いの一つです。(流れを理解してもらうため平山城・新城の混同させました。)それ以後も平山城は、関ヶ原の合戦に敗れた薩摩を、徳川家康が攻めてくるという噂で、蒲生城・建昌城・平山城などに立て籠もり対抗しようと考え、備えを固めたこともありました。また西南の役では帖佐の西郷軍に味方した人たちが立て籠って官軍に対抗しようとしたという話が伝わります。

なぜ反乱が次々に起きたのだらうと、考えながら「始良町郷土誌」を読んで見たらどうでしょうか。この城一つ取ってもまだまだ奥の深い話がいっぱいあります。

城で大切なのは、どんな城にするかという設計図(縄張り)ですが、この城の縄張りを見るのであったら、冬の期間(虫・蛇が居ないし藪も繁っていない)を薦めます。また、始良町教育委員会発行の「始良町中世城館跡」をもって行かれることを薦めます。この平山城は車も登りますし、駐車場も帖佐八幡神社や桜公園にあります。平凡な山に見えますが、断崖や急斜面に上られた城山ですので、慎に行動して下さい。

秋の一日、米山薬師から新正八幡神社へ(その逆もおすすめ)、岩尾根を歩くハイキングコースは素晴らしいです。さらに新正八幡神社に着いたら、神殿の裏に回って土塁に登り椎の木の下から、下を見下ろして下さい。そこにさすがに山城だという厳しさが見えるはずです。

宝泉孝志

つま焼の始まりは始良から

古帖佐宇都窯跡のご案内

島津義弘公が慶長の役(2回目の朝鮮出兵)の折り、陶工として連れ帰った金海によって築かれた窯跡が古帖佐宇都窯跡です。この窯跡は現存する薩摩焼の古窯の中で一番古いものです。そして藩主御庭焼といわれる豎野系の最初の窯です。すぐれた戦国武将であり、また一流の茶人であったと島津義弘好みの茶入れや茶碗を焼いた窯跡です。

商人たちに抹茶碗や茶入れなどに関心が高まった時代です。文禄・慶長の役で朝鮮に出兵した武将達は、すぐれた焼き物文化を持つ朝鮮の陶工を競って連れ帰り、自領内で焼物を焼かしています。陶工達は単なる捕虜ではなく、技術者として厚遇されていたと考えられます。



白蛇褐釉肩衝茶入

17世紀後半

薩摩焼の発祥の頃の作品

黎明館蔵

千利休の門下生であり、すぐれた茶人であった義弘の美意識を反映して朝鮮式の手法に、瀬戸の技法が調和した鑑賞品としても価値の高い優品が多く焼かれたといわれています。しかしながら慶長13年、義弘が居城を加治木へ移しました。金海も加治木反土に移り御庭焼である御里窯を開きました。そのため宇都窯は自然と廃窯となりましたから、わずか1～2年の間に数回使用された過ぎないと考えられています。

この窯跡は昭和9年に発掘調査が行われ、

- ① この窯は義弘の御庭焼として作られたこと。
- ② わずかに数回使用されたに過ぎず、操業期間が短かったこと。

など、史実を裏付ける成果が得られています。このことを受け昭和38年始良町の史跡に指定されました。また、平成12年には遺跡詳細分布調査事業の一環として第2回目の発掘調査が行われ、

- ① 窯に改築の痕跡が認められ、Ⅰ期とⅡ期の2時期に分けられること。
- ② Ⅰ期の窯は国内でも類を見ない特殊な構造の窯であること。

などの成果により平成14年に県指定史跡になりました。

この宇都窯と御里窯で焼かれた焼き物（金海の作品）は「古帖佐もの」と呼ばれ古美術界で珍重されています。東京国立博物館や根津美術館に収蔵されているそうです。見てみたいですね。 中野則子

ひざつきくりげ（膝跪駢）の墓と馬踊り



鹿児島神宮に奉納される馬踊り

地域総出の楽しみもなくなりました。

また、このように人々に親しまれ賑わってきた膝跪駢の墓ですが、今では訪れる人も稀になり、忘れられた存在になっています。

本多幸子

ヨイサーヨイサー元気のよいかけ声、馬が踊る、人が踊る。

毎年1月18日に国分八幡（鹿児島神宮）に踊りが奉納されますが、戦後まもなくの頃までは、19日には「帖佐亀泉院の膝跪駢の墓」、20日は「蒲生八幡神社の馬櫛神」に。当町からも三拾町、深水、豊留の農家が馬を出し、地区の青年団や婦人会の人たちが協力して参加し、踊りを奉納していたようです。3日間とも奉納のあとには、知り合いの家、親類縁者の家を訪れ、ご祝儀をもらって回ることが慣例でした。最近では馬を飼育している農家もなくなり、このような



裏面に 昭和27年 帖佐町豊留青年団と記された写真

始良歴史ボランティア協会は、町内の史跡等をガイドする組織です。

歴史国道の白銀坂・篤姫にも出てきた島津久光の平松城や菩提寺の紹隆寺墓地、帖佐麓から米山薬師、勝海舟の書のある総禅寺墓地、島津義弘の帖佐館城跡、平山城跡、山田の凱旋門や西田の田の神、北山地区などガイドします。鹿児島県の中心の位置にありますから史跡も多いのです。

史跡がどこに何があるかは多くの方がご存じでしょうが、ちょっとだけ勉強しているガイドの話を聞くと、もっとふるさと始良がスキになれると思います。ガイド料はいりません。グループ2～3人以上で歴史民俗資料館に申し込んでください。電話は 65-1553 所在は東餅田498番地です。